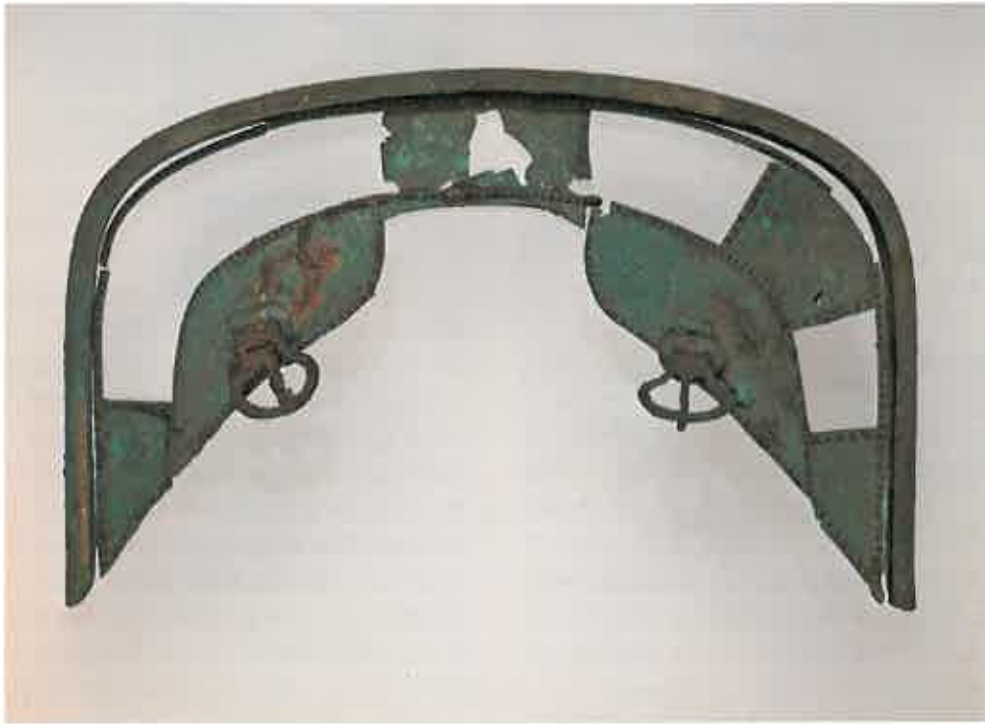


陣陵

No. 7

関西大学考古学等資料室彙報

昭和58年5月31日発行



金銅狂鞍金具(群馬県出土)

目次

国立歴史民俗博物館を見る……………	2
渤海東京城出土の和同開珎……………	3
シカゴ大学東洋研究所博物館……………	4
はすば歯車付き綿繰機……………	6
鳥形の須恵器に想う……………	8
釜山市立博物館を訪れて……………	9
昭和57年度調査報告「佐渡・信濃」……………	10
資料室資料紹介……………	11
編集後記 他……………	12

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06—388—1121)

国立歴史民俗博物館を見る

横 田 健 一

本年4月24日に、千葉県佐倉市の佐倉城内に国立歴史民俗博物館を訪れた。上野から京成電車の特急で約1時間、京成佐倉駅下車、西の方へ約1km歩いて、左側の城址の丘へ登ると、新しい博物館の前へ出る。この博物館の構想がたてられたのは10余年前にさかのぼる。その時、日本学術会議では、それについて、意見、注文をつのった。

私は当時、学術会議の史学部門の会員であり、かつこの博物館の委員であった井上智勇先生（京大名誉教授、西洋史）に、「関東大震災や第二次大戦における都市の絨緞爆撃による大火災にかんがみて、大都會の市中は絶対に不可である。都心から相当離れた、周囲に家のない森林など緑の多い地帯に建設してもらいたい」と注文をのべたことがある。

佐倉城址は、その点では、注文どおりの土地であった。

博物館の内部は四展示室に分れる。第一展示室は古代の考古学が主要な部門で、先史時代から縄文、弥生、古墳時代から律令国家に及ぶ。文書はこの律令国家のところで正倉院文書などが少し出てくるくらいのことである。

第二、第三が主として王朝時代から中世にあてられ、近世以降は第四展示室にあてられているようである。

ようであるというのは、実は第一展示室の考古学のところで時間をとりすぎ、かつ疲労してしまって、第二室以下への路をあやまったらしく、第四室をみて外へ出たあとで、第二、第三を見のがしたらしいことに気がついた。第一から西側の階段を降りるべきところ、内庭の廊下を降りてしまったのである。もう一度入館料を払って入り直そうかと思っただが、疲労したのと、帰りに時間を要するので、いずれ又、再来するからと思ってやめたのである。

展示をみると「日本のあけぼの」では「縄文人の家族」「縄文人の道具展示資料目録」「縄文土器とその地域性」など、弥生時代のテーマ「稲と倭人」では「鳥杆の習俗」「稲作の系譜」、古墳時代のところでは、「前方後円墳の時代」のテーマに「箸墓古墳」「綿貫観音山古墳」など。そして箸墓の立体模型を展示し、その半分は現状の樹木の茂ったところ、半分は原初の五段築成の状況復原を対



国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）

比してみせる、といった風である。

この「前方後円墳の時代」のところでは、奈良県葛城の新山古墳の鏡が三十四面全部ならべられていたのは、目をみはった。とくに直孤文鏡が三面ならべられていて比較できるのは、ゆっくり時間をかけて観察したいと思った。

実物も少なくないが、総じて巧妙なレプリカ（複製）と縮尺した立体模型が多く用いられていた。建築など、第四展示室などでも、銀閣寺の東求堂、大徳寺の大仙院、民家では橿原市今井町の今西家その他などがならべられていて、なかなかよいと思った。律令国家のところの平城京中樞部の立体模型なども、大層よかった。いろいろの問題を考えさせてくれる。

当博物館は、国立大学の共同利用機関として設置され、展示を主とする博物館機能とともに、その機能と歴史学、考古学、民俗学の三研究部門を媒介する情報・資料部門の計四部門を持つという。そして各部門の研究者は、千里の民博同様、教授、助教授、講師、助手などの職務身分を持ち、各々が研究テーマ別にわかれて、共同研究をやる組織になっている。その研究テーマは(1)「古代都市の研究」、「近世都市江戸町方の研究」、(2)「古代祭祀遺跡に関する基礎的研究」、「通過儀礼の体系的な研究」など学際的なもの、いくつかの部門の協力的なテーマの他に、(1)歴史の部門では「中世荘園遺構の調査ならびに記録保存法の研究」、(2)寺部門では「古代集落遺跡の研究」、(3)民俗学部門では「民俗誌作成の総合的研究」などがあるという。（同館研究報告第1集、井上光貞氏序文）

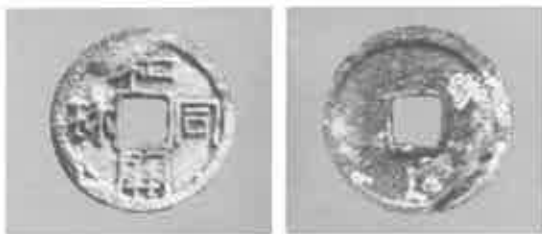
渤海東京城出土の和同開珎

網 干 善 教

「温故知新」という言葉がある。出典はいうまでもなく『論語』の「子曰、温故而知新、可以為師矣」によるもので「古い物事を究めて、新しい知識や見解を得ること」という意味であるが、これとやや共通する問題で、考古学研究上反省するところがある。それは、最近全国各地で莫大な量の発掘調査が行われ、毎日の如く新聞紙上に「新しい発見」が報道されている。そしてその評価が「新しい発見」とか「定説を覆す」とかいった見出しで取扱われている。こうした傾向は次から次へと新しい情報の提供となっているが、そのために新資料の出現に目をうばわれ、過去の重要な成果が忘却されてしまうという結果も生じかねない。そこで反省と警告の意味をこめて、渤海東京城跡出土の和同開珎の問題を考えてみたい。

唐の都長安、現在の中国陝西省西安にある陝西省博物館に西安市出土の和同銀銭が展示されている。その説明文によると、1970年10月、西安市の南郊にある河家村から出土した5枚の銀銭で、これは日本からの遣唐使が所贈したものであると記されている。日唐関係史からみれば当然といえば当然のことであるが、「唐長安京から和同開珎出土」といえばニュースになり得る。事実このことに大きな意味をもたせて喧噪され、ロマンのある事実として高く評価されている。確かにそうしたむきもあるに違いない。だがこれと同じような事実があるにもかかわらず、すでに忘れ去られようとしている事象がある。それは渤海国の故都東京城から出土した和同開珎である。

昭和14年、東亜考古学会から刊行された『東京城一渤海国上京龍泉址の発掘調査』と題する巨冊の報告書を見ると、この発掘調査は昭和8年と9年の2回にわたって実施されたが、第2回目（自昭和9年5月20日、至6月19日）の調査に際して和同開珎1枚が出土している。これについて報告書は「（前略）我々は宮殿址或は寺址の発掘に際して、開元通宝等の出土を期待してゐたが、図らずも唐銭を発見せずして却って我が和同開珎一個を採集し得たことは、洵に奇縁と云はなくてはならない。この渤海国と我国との修好関係を如実に物語る泉貨は既述の如く第五高殿址の西室床上から発見されたものであって、其経八分を計へ、中央に二分の方孔が穿たれ、表裏とも周円並に方孔に五



東京城出土の和同開珎



渤海東京城の位置(中国黒龍江省)

厘程の輪廓が施され、和同開珎の四字が鋳出されてゐる。製作頗る優れ、銅色も亦鮮麗である。（後略）」と記載されている。

日本と渤海国との交渉は日本古代史研究において重要な課題であることはいうまでもない。例えば『続日本紀』をみると渤海国に関する記事は神亀4年から5年にかけて7回、天平2年には2月に4回、11月に3回、12月には実に10回、天平勝宝元年に1回、4年から5年にかけて4回、天平宝字2年に4回、4年に4回、5年から8年にかけて4回、天平神護2年に1回、宝亀2年に2回と計46回もみられ、その他「渤海楽」に関して3回の記述がある。

こうした歴史的背景から考えてみると渤海東京城から和同開珎が出土したことは当然のことであるかも知れないが、そうした事実のあったことにあまりふれられることがない。しかし、東京城出土の和銅銭は日本と渤海国の交渉を示す最も確実な貴重な証拠であることはいうまでもない。

こうした事実が50年も以前に報告されていることを考えてみる必要がある。

シカゴ大学東洋研究所博物館

加藤 一 朗

はじめに、古代オリент諸学のメッカといわれる当研究所についてひとこと。これは、1919年、アメリカの生んだ最初のエジプト学者 J.H. プレストッドと当時ロックフェラー財団をひきいていた J.D. ロックフェラー・ジュニアとの間の友情関係から成立したもので、物的には、内庭を囲む口の字型3層の建物である。3階は書庫、2階には所長室・秘書室・事務室・教授個室・教室・図書閲覧室があり、シカゴ大学人文学部東洋言語文学科は、この階におさまっており、かつて筆者はこの科の学生であった。1階が博物館で、これにプレステッド・ホール（講堂）とロビーが付属している。地階は当研究所が行なってきたオリент諸地域における発掘からもたらされた遺物の倉庫であり、またこれら遺物の修理・復元の場合もある。

さて1階の博物館であるが、陳列品は総じて当研究所の発掘品・購入品・遺跡の模型や復元図・他国の博物館の所蔵する重要遺物のレプリカからなるが、一口にいっていずれも逸品ぞろいで、美術館的な要素がかなり強く、またレプリカ類は学生たちの研究に大いに役立っている。そして当研究所の成立事情から想像されるように、博物館ではエジプトの部にもっとも力が注がれている。

見学順路に従っても第1室がエジプト室で、手

前から奥へと時代順に、墓の復元・各種土器・石刀・石パレット・石壺・碑銘・壁画・陶器・ガラス器・木棺・彫刻・浮彫り・ブロンズ製品・道具類・楽器・ミイラなどが整然と配列されている。見学者はまず、壁に貼られた H. カントー作のポット・マップ（土器を中心とした先史遺物の時代別表示）に照し合せながら陳列品を見ることによって、先史諸文化の特徴をつかむことができる。なかでも、アムラ文化に属するフリント製ナイフの刃の精巧さ、玄武岩・閃緑岩のような硬質の石材をもちいて内側をたんねんにくりぬいたゲルゼ期の石壺の製造技術の高さには深い感銘をうける。それから見学者は、古代エジプト王国の建国碑であるナルメル王の石パレット（レプリカ）や初期王朝時代の諸王の名を記したタブレットの粘土への押し型によって王国成立の日々に想いを馳せる。古王国時代のものと思われるホルス（タカ神）の石像も興味深い。頭部から尾部へと管状の穴が貫ぬいているのである。この穴を通して、尾部から神官の吹きこむ言葉が、この像の前に居並ぶ信者たちには、この神の神託と受けとられたのではあるまいか。中王国時代のもので注目されるのは、深く鋭い陰刻でヒエログリフ（象形文字の楷書体）の彫られた供養碑、来世の安寧を願うコフィン・テキスト（棺文）と完全さを象徴するホルス神の目の描かれている木棺、それにこの時代特有の、多くの乗組員をのせた木製の船（副葬品）などである。コフィン・テキストのヒエラティック（象形文字の行書体）の筆致はすばらしい。新王国時代のもものでは、護符や道具類も興味深い、もっとも心をひかれるのは、白い石灰岩の面に薄肉彫りで浮上らせたヒエログリフの精緻さ、美しさである。本来これらの文字には極彩色がほどこされていたのであるが、その色はほとんどおちてしまっている。しかしそれゆえにこそ、彩色によってかくされてしまうことを知りながら、毛ほどのみのくろいを残さなかった彫刻家たちの良心・誠実さが目のあたりに見られる。これらの文字と僅かに残った色合いとのかもしだす美しさは妖艶といってもよいほどである。目を転じるとこのあ



A アッシリアの有翼雄牛（石彫、前8世紀）

たりには、ツタンカーメン王の巨大な立像が周囲を威圧して立ち、その先に並べられている乾燥しきった黒褐色の数体のミイラは、やはり見るものに何がしかの感慨を覚えさせずにはおかない。

エジプト室のつきあたりの壁の前に「アッシリアの有翼雄牛」(写真A)が^{きつりつ}屹立している。イラクの^{キサルパド}コルサバドにあったサルゴン2世の宮殿のあとから発掘されたもので、いかにも軍国主義的であったアッシリア人の作品らしい、筋肉の強調された力強い作品である。写真では見られないが、前側面から見るともう1本前脚がつけられている。つまり計5本の脚をもっているわけであるが、古代オリエントではこのような、やや非合理的な表現も決して珍らしくない。これにつづく第2室はアッシリア・アナトリア室とよばれ、これら両地方の土器・石器・銅器・象牙製品などが数多く並べられているが、圧巻は、やはりコルサバド出土の薄い浮彫りで、^{おも}主なモチーフは等身大に近い人物や馬の行列である。他の博物館で見られるライオン狩りなどの殺伐な図とは異なり、ここにはものしずかな、平和的な人びとの歩みが看取される。エジプトの浮彫りや絵画のやや角ばった人物像とは対照的に、ここにはメソポタミア流の丸みをおびた描写が支配的である。第3室(バビロニア室)では各種土器・金属器・円筒印章や黄金冠(レプリカ)などのほかに、新バビロニア時代の都のイシュタル門を飾っていた焼き煉瓦製の怪獣像(レプリカ)やハンムラビ法典を刻んだ石柱(レプリカ)、またバビロニア特有の聖塔(ジグラト)の模型も見られる。

第4室はイラン室である。この地方特有の彩色土器やルリスタン青銅器・小型黄金装身具なども多数陳列されているが、何といても重さ10トンの「ペルシアの巨大牛頭」(写真B)が人びとを圧倒する。このためこの室は一般に「ペルシアの牛(パーシャン・ブル)の室)」とよばれている。ごらんの如く、この牛頭は^{つの}角を除いて完全な形を保ち、黒ぐろと光っている。この牛頭は、もう1つ



B ペルシアの巨大牛頭(石彫、前5世紀)

の牛頭と^{ついで}対をなして、かつてペルセポリスの百柱殿の入口の巨大な石柱の柱頭を飾っていたのであった。筆者はイランを訪れた折、このかたわれの方も見る機会をえた。この方は破損が著しく、色もこの写真とはにてもつかない灰褐色をしていた。実はこのシカゴの牛頭も運ばれてきた当座はかなり破損していたのである。それがなぜこのような完全な形をとりもどしたのか。その秘密を筆者は、偶然インターナショナル・ハウス(シカゴ大学学外国際寮)の食堂で、イタリア系の一老人とテーブルを一つにしたとき知ることができた。雑談を^{まじ}交えているうち、彼がもと当博物館の遺物復元係であることがわかった。彼は「あの牛頭も私が復元したのだ」といった。筆者は「何にもとづいて復元したのか」と問うた。彼はこう答えた「フィレンツェで育てば誰でもこれくらいのことはできるのさ。私は遺物の復元を生涯の仕事とし、姉は彫刻家になった。」

こうして復元された牛頭を黒くぬり上げてしまったのは、アメリカ式展示法とでもいいえようか。この博物館はまた、最後の第5室としてパレステイナ室をもち、キリスト教関係の資料を展示しているが、この室がなければ欧米の博物館は体裁がととのったことにはならないのであろう。

はすば歯車付き綿繰機

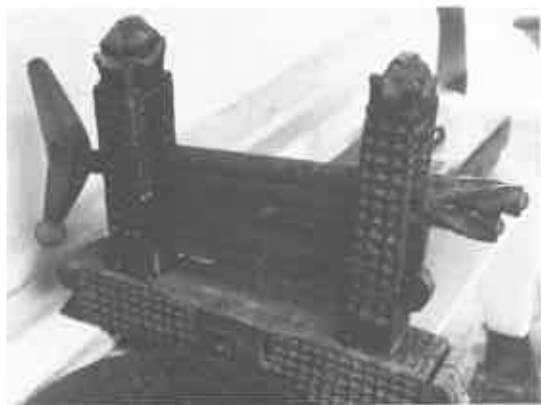
—スリランカと吉備にねじの起源を考える—

下 間 頼 一

関西大学図書館蔵書にJ.Needhamの名著 Science and Civilisation in China がある。その4巻に古代インドの綿繰機の写真が見られる。今日の製粉・製鋼・ゴム・食品など産業機械・食品機械等に広く用いられる roller mill の原形であろう。スリランカに現存するというローラミルや、その駆動用の一對の噛合ったはすば歯車の写真は、機械技術の起原への断ち難いざないである。

欧州への往還、Colombo を乗継地に選ぶと、乗継時間を利用して、Sri-Lanka の古都 Kandy 訪問ができる。キャンディはコロomboより車で東北東へ2時間半、シンハラ王朝最後の王都 (1592—1815)。高原の盆地の町。美しい湖、輝く緑、爽やかな風、そして小乗仏教が仏歯寺に生きている。その隣、湖を眺める小高い湖畔に Kandy National Museum がある。

象を彫刻した玄関石を入ると、中庭の回廊に roller cotton gin ローラ綿繰機 2台が目を引き。シンハラ様式の木製手動ローラ綿繰機である。種子の付いた綿毛、すなわち実棉は綿繰機で綿毛と種子とが分離され、繰綿となる。この綿繰機は作業者が腰を下して固定する座のついた木製ローラミル。下ローラをクランクで回すと、両ローラ端の噛合った一組のはすば歯車によって、上ローラは円滑に回転する。押付けられた両ローラ間に実棉を供給すると、綿毛はローラ間を通り、種子から分離される。最初は恐らく平歯車伝動であつたろう。平歯車は遊び(がた)が付きもので、両ローラ表面速度に差を生じ易く、綿毛を傷める。



ねじ歯車付き綿繰機(キャンディ博)

幾多の試行錯誤をへて、遊びや滑りが少ないはすば歯車伝動へと進歩したのであろう。

現在の機械用語でいえばn枚のはすば歯車であるが、n条の円筒ウォームともみられる。常識的にはn条のねじ歯車ともいえよう。以下ではねじ歯車を用いよう。

キャンディ博物館には6条ねじ歯車付きの簡単な機と、4条ねじ歯車付きで、梓木に直線幾何文を沈み彫りした頑丈な機とが展示されている。シンハリ式ローラ綿繰機は、ローラミルや歯車やねじの起原について暗黙のうちに多くを語る。

角山幸洋先生(染と織、昭55)*によれば、インドス河口東南のインドのグジャラート州にはクルカと呼ばれる同形の綿繰機がある由。

スリランカといえばサファイアやルビーを連想する。宝石採掘の町 Ratnapura の National Museum にもねじ歯車付きローラ綿繰機が展示されるという。シンハラ語で Kapu Katina Yanthraya と呼ばれる。同一機がスリランカの方々の博物館に蔵される事実は、スリランカにおけるねじ歯車付きローラ綿繰機の定着を物語る。

綿繰機は日本にもある。東大阪市立郷土博物館及び大阪市立博物館に同形の綿繰機がある由である。さて、葦が青々と伸びる吉備路。巨大な古墳の丘が長々と延び、備中国分寺五重塔のシルエットが美しい。作山古墳のすぐ南、群家の古い伝えの黒媛宮に詣でた。その境内の吉備考古館ですばらしい綿繰機にお目に掛った。3条ねじ歯車付きローラ綿繰機である。完形、高精度のねじ歯車に深い感銘を覚える。かつて実見したキャンディ博のあの綿繰機が想起される。条数の相違はあるが、機械構造は全く同様、下ローラをクランクハンドルで操作する。

ねじ歯車はピン歯車や平歯車のような歯車としての特性、ボルト・ナットやねじジャッキに見られるねじ螺旋面としての特性との両面を有する。ねじ歯車はねじ原理を取入れた複合歯車で、遊びのない円滑な噛合い伝動を特長とする。相当に高度な機械要素と言わねばならぬ。

棉の繊維としての利用はインドス文明 (ca.2500 B.C.—ca.1500 B.C.) に始まるという。棉利用は各

方面に伝播し定着した。インドの棉と共に、インド式ローラ綿繰機は東西へ伝播し、6世紀にはカンボジア、さらに雲南へ。13世紀には新疆へ、さらにイスラム教徒の手で欧州へ伝えられた。棉は7世紀に広東・広西へ、10世紀に福建へ、また13世紀に中央アジアから陝西へ。そして14世紀明代に棉栽培は中国全域へ普及し、棉紡織は農家の重要な副業となった。黄河―淮河間の黄土沖積地帯は棉作が最も盛ん。中国本土へ西南と西北から棉が伝わり定着開花したが、インド式ローラ綿繰機はついに入らなかつた。

中国では攪車と軋車という独特のローラ綿繰機が発達した。攪車は上下両ローラにクランクハンドルが付く。軋車は下ローラはクランクハンドルで、上ローラにはずみ車が付き、足踏みクランクで回す。両機種とも両ローラは別個に駆動される。

処が雲南省博物館にはシンハラ式ねじ歯車付きローラ綿繰機が保存されているという。

棉の栽培と綿繰技術の日本渡来は中国や韓国をへてとされる。中国に全く見られないねじ歯車付き綿繰機は何時何処から来日したのであろうか。

スリランカの島史によれば、シンハラ人（現在スリランカの人口1447万人のうちシンハラ人71%、タミール人23%、他に数民族、原住民のヴェッダ族は南の森林地帯に少数が残存するのみ）の先祖は前5世紀頃西北インドのラーラ国の王子と一行約700人が来島したとされている。インド・アーリア系のシンハラ人は北インドの言語・風俗・技術など一切の文化を持込んだ。前3世紀、

アショーカの王子マヒンダが仏教を伝え、南方小乗仏教の正統派として今日に至っている。仏陀がその下に瞑想し悟りを開かれたブッダ・ガヤの菩提樹の分枝は、アショーカ王の王女サンガミッタにより齎らされ、今も北方の仏都アヌラダプラにスリ・マハ菩提樹として生き続けている。前3世紀頃より南インドのドラヴィタ系のタミール人が来島し始め、シンハラ人との抗争は千年に及ぶ。現在シンハラ語とタミール語が汎用される。

タミール人は主として北辺に住む。綿繰機がシンハラ式と明示されて島央やや南のキャンディと島南のラトナプーラに現存する事より、キャンディ博の綿繰機は、シンハラ人の故郷である西北インド、すなわち現パキスタン北部に由来するのであろう。ここは古代バクトリアの東端、ガンダーラ地方である。ねじはギリシア世界で知られ、ヘレニズム時代盛んに利用された。ギリシアのねじ技術は、ギリシア文化の東漸に伴いガンダーラに伝播し、平歯車付ローラ綿繰機を生出したのではないか。さらにガタをなくして綿毛を傷めずに実と分離したいと考え、ついにねじ歯車付きローラ綿繰機を考案したのではないか？

一方、地図の上で（インダス流域）・（北インド）・スリランカ・雲南・日本と拾うと、自ら一つの径が浮かぶ。棉利用のねじ歯車付き綿繰機の発生と伝播の径である。あるいは遠い昔、ねじ歯車はインドあたりで独自に考案されたのではないか？インド起原説である。キャンディ博や吉備路で見事なねじ歯車を見ていると、ねじのギリシア起原説への素直な問掛けが湧いてくる。複数起原である。

吉備路探訪の夢想を敢て記そう。スリランカと吉備に現存するねじ歯車付き綿繰機は寡黙のうちに技術の起原と伝播への知的探求心を誘って止まない。



ねじ歯車付き綿繰機(吉備考古館・全長380mm)



綿繰機のねじ歯車
(吉備考古館・外径36×長51mm)

鳥形の須恵器に想う

泉 森 皎

ある春の早朝、「春眠暁不覚……」の言葉どおり、眠い目をこすりながら窓をあけると「チュー、チュー」とすずめよりやや大形の鳥が一羽鳴いていた。秋から冬にかけては百舌鳥がよく飛んでくるが、なんという鳥であろうか。

その内、頭の中の片隅で「みよし風土記資料館」でみた須恵器の瓶に取りつけられた鳥がはばたき出した。また頭のさらに奥から「豊田市立博物館」蔵品の長頸壺の蓋に取りつけられた鳥が鳴き出した。

どうもこれは「鳥形甕」の資料を発掘しながらいまだかつて考古資料の「鳥」に関しての一文をまとめるに至っていないためらしい。

弥生時代の鳥形木製品については金岡閑氏の一連の研究があり、また纏向遺跡や石見遺跡など、古墳時代の遺物にも丸彫りのままのものや板状に加工した鳥形製品が存在し、祭祀遺物として理解されている。

埴輪にも水鳥、鷄、鷹など鳥を題材にしたものが多い。

一方、須恵器も鳥に関連するものが多くみられる。これらを器形ごとに分類してみると、

1. 台付長頸壺の装飾として鳥形が付けられるもの。この内、蓋の鈕に鳥形を付けるもの（1-B）と、長頸壺の肩部と蓋部の両方に付けるもの（1-A）がある。
2. 平瓶を鳥形にし、器部の側面に羽根や尾羽根を表現するものを取り付けたり、線刻したもの。
3. 甕の側面に首、手羽、尾羽根を取りつけた

り、線刻したもの。

4. 長頸壺の口部に鳥形を取り付けたもの。

5. 平瓶の取っ手や蓋を鳥形にしたもの。

5種類に別れるがその分布を表にとりまとめてみると、地域別、時期別に一定のまとまりのあることが知られる。

1は東海地方を中心に一定の分布圏をもち、6C後半～7C代にかけての古墳に副葬されている。

2の鳥形瓶は岡山、広島地域を中心に一部鳥取地方にまで及んでいて、器形は一定でなく、写実的な広島県高宮出土例から、鳥形であろうと観察できる岡山稼山4号墳出土例まで多様である。いずれも7世紀代に下る時期が推定されている。

3は近畿地方を中心とするが、一部九州の福岡県番塚古墳などで出土している。古い時期の須恵器にみられるが年代幅がある。

4は1と2の中間的な形態で、広島県から一例出土している。2の分布圏の範囲に重複している。7世紀代に比定されている。

5は白瓷の平瓶の蓋や鈕を鳥形にしたもので、東海地方で生産され、長野県下で一例出土している。もっとも時期の下るもので9世紀代に下る。

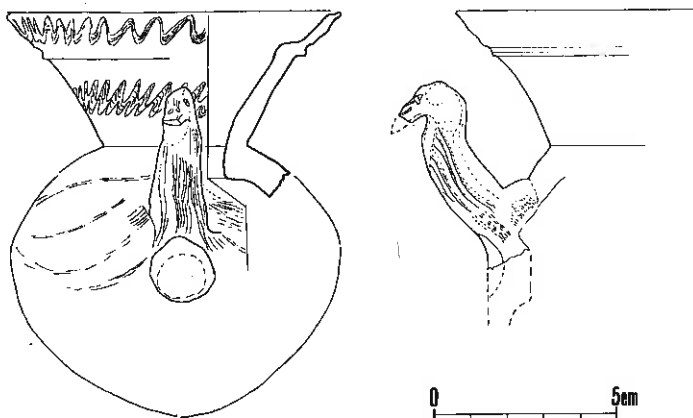
さて鳥形須恵器はどのような意味があるのだろうか、

(1)死後の魂を托す葬送儀礼との結びつける説、(2)鳥船で死者の靈魂を運ぶという説、(3)朝鮮の鳥形土器の分布との関連から農耕儀礼との結びつきを考える説などがある。

須恵器は死後の世界で使う飲食器や食物を供献した器であるとする、そこに鳥形、あるいは鳥の装飾を用いたものがあるのはそこに思想的な背景が存在するとみるのは自然であろう。さらに資料を加えまとめてみたい。

鳥形須恵器出土地名表

分類	出 土 地
1-A	愛知県岡崎市岩津1号墳
1-B	静岡県浜松市姦子森古墳
	愛知県一宮町炭焼平54号墳
	愛知県豊橋市万福寺古墳
	愛知県名古屋市長古墳
	愛知県蒲郡市諏訪山古墳
	愛知県蒲郡市大塚町の古墳
	三重県鳥羽市蟹沢古墳
2	広島県高田郡高宮町
	広島県高田郡向原町奥田山
	鳥取県東伯郡三朝町段
	岡山県岡山市宮浦東千代川
	岡山県久米町稼山4号墳
	(他に広島県下から5例出土)
3	福岡県荏田町番塚
	岡山県勝田郡出土
	奈良県平群町西宮大塚
	奈良県橿原市一町新沢千塚
	奈良県橿原町栗谷 栗谷古墳群
	三重県明和町神前山1号墳 他
4	広島県山県郡千代田町石塚2号墳
5	長野県諏訪市金鑄場遺跡
	愛知県三好町黒笹4号窯



奈良県橿原町栗谷古墳群出土鳥形甕

釜山市立博物館を訪れて

米田文孝

1982年5月上旬、古代史・考古学専攻学生を中心として韓国・慶州市周辺を探訪した帰途、釜山市で上船待ちの合間を利用して釜山市立博物館を見学する機会を得た。約1時間駆足で垣間見ただけであるが、教示されることが多く、その印象を記しておきたい。

博物館は釜山市中心部の東方、南区大淵洞に所在し、国連共同墓地に隣接した高台に位置している。1978年7月11日に開館し、約3万㎡の敷地に鉄筋コンクリート造（地下1階、地上2階、延床面積約4800㎡）の建物で、展示室（8室）には2階部分約1800㎡が充てられている。ここでは第1・第2展示室である先史伽倻室、伽倻室を中心に述べたいと思う。

展示品は新石器・青銅器・三国時代と多岐にわたり、立体・平面ケースに整然と陳列されており、照明も自然採光を十分に配慮したものである。また、展示品は完形品が中心で、複製品と解説パネル類が主体を占める比率の高い日本の博物館と比較して、文物の豊富さを再確認させるものであった。

これらの中で特に目を惹いたものは、日本製品の可能性の高い中間無帯式の筒形銅器である。材質は青銅と推定され、2点展示されている内の1点は上部約 $\frac{1}{4}$ を欠損するが、両者ともほぼ同形同寸である。完形品は全長約13cm、口径約2cm、底径約3cmを測り、これらには全長約5cm、直径約0.5cmの響鳴音を奏するために用いられたと推定される青銅製小棒2点が伴う。

ところで、日本で筒形銅器が盛行した4世紀後半から5世紀前半、さらに6世紀にかけて当該地では他に穴沢味光・馬目順一・樋口隆康・



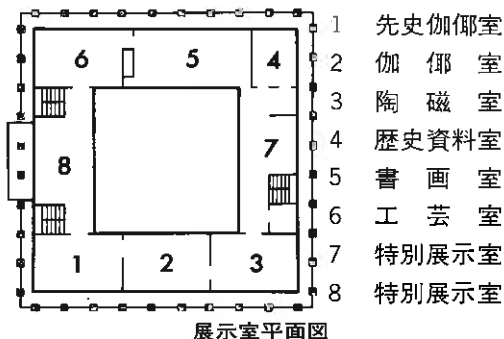
釜山市立博物館蔵筒形銅器

西谷正氏、網干善教先生らが指摘されるように、慶尚北道高靈郡高靈邑池山洞古墳群32号墳出土横矧板鍔留銜角付冑・短甲・頸甲・肩甲等の武具セット、慶尚南道咸陽郡水東面上栢里古墳郡出土三角板鍔留短甲、伝釜山市東萊区連山洞古墳群出土豎矧板鍔留眉庇付冑・三角板鍔留短甲、東萊区福泉洞古墳群出土豎矧板革綴短甲、晋州古墳出土鏡、昌寧郡昌寧校洞古墳群89号墳・咸安郡咸安末伊山34号墳出土鹿角製刀装具など、日本製品と推定される遺物が散見される。一方、九州北部・近畿地方を中心として伽倻系陶質土器、赤褐色軟質土器、甲冑、馬具、装身具などの分布が知られ、両地域の頻繁な交流がうかがえるが、これらをして「任那日本府説」、「騎馬民族征服説」との関連も既に指摘されるところである。

このような状況下において、伽倻地方の文物を展観する場として、また日韓古文化研究者の相互交流センターの1つとして、今後当博物館の占める位置はますます高まってゆくことであろう。



釜山市立博物館（パンフレットより）



昭和57年度調査報告「佐渡・信濃」

昭和57年度の調査研究は佐渡・信濃の縄文遺跡を巡り、蒐集活動も実施し、多大の成果をあげた。

3月中旬という季節で、天候不順が心配されたが、快晴に恵まれ、網干善教教授指導のもとに遺跡の踏査、蒐集もとどこおりなく実施できた。

本学資料室所蔵の佐渡の関係資料は、9ヶ所の遺跡が記され、縄文土器片、石斧、石鏃、貝輪、石匙などの資料である。この資料の遺跡の位置、状態、周辺環境などを調査し、本学資料との対比、出土資料の確認などを行った。

新潟県佐渡郡新穂村「源太平遺跡」資料として縄文土器片と石斧1点が所蔵されている。これは地元の漢学者で佐渡農学校長であられた「後藤与作」氏の寄贈されたもので、中期縄文土器片と石斧である。現在標高20mのこの遺跡も徐々に消滅の危機に曝されており、遺跡を二分して道路が造られ、また、民家等も増築されている。著名な遺跡ゆえ、公地として買い上げ、早急に保存対策を講じていただきたいものである。表面採集も若干の土器片と石鏃などがあつた。

新潟県佐渡郡新穂村「垣ノ内」遺跡資料として、石鏃31点（有莖16・無莖15）と摩製石斧（撥形）1点を所蔵しており、明治31年発掘され、後藤与作氏が寄贈されたものである。この「垣ノ内遺跡」は地元新穂村教育委員会が、昭和55年3月26日より4月中旬まで約500m²を調査され、土器、石器、人骨片、須恵器など多数の資料を発掘した。平野の水田地帯にあり、縄文後期より8世紀までの複合遺跡である。翌56年3月調査報告書が発行された。この報告書及び資料の表面採集で得た資料により、本学の所蔵資料も佐渡「垣ノ内遺跡」のものと確認された。この遺跡は五反田、出口、苗代、ロヶ坪、川端と広大な遺跡であるので、年次計画



新潟県佐渡郡新穂村「垣ノ内遺跡」

で継続的に調査してほしいものである。その他最南端の小木町宿根木の資料も若干所蔵されているので、当地まで、当地まで足をのばし調査した。

近年文化財調査は各地において活発な活動があり、当地においても資料収蔵庫や資料館、陳列室等が設けられており、地域の社会教育の高まりや普及にはめざましいものがあり、喜ばしいことである。今後一層の発展を願うものである。

長野県下の出土資料としては、下伊奈郡を中心として野尻湖、諏訪湖周辺の資料が所蔵されており、縄文資料の土器、石器などである。

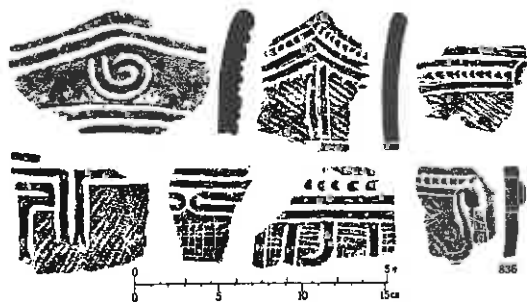
飯田市座光寺「大門原遺跡」は縄文早期より古墳期にわたる複合遺跡で、豊富な遺物を包蔵し、特に石器の出土が多い。本学所蔵資料の中にも土器片、石鏃、石屑、石斧などがある。大正13年に著された鳥居龍蔵氏の『下伊奈の先史及び原史時代』に既に遺跡写真が掲載されており、著名な遺跡である。中央自動車道通過に伴ない調査され、住居址と多量の遺物が発見された。これらの遺跡を含めて昭和56年長野県史別巻「遺跡地名表（文献目録）」が刊行された。

県下の遺跡を知る上で非常に有益であり、考古学文献図書の近來の快作である。長野考古学界の高水準を示す一例である。機会があれば再度調査を行い、本学所蔵資料の解明を行いたい。最後に調査に便宜をはかっていた関係各位の方々に感謝の意を表します。

〔角田芳昭〕



大門原遺跡出土「石斧」



源太平遺跡出土「縄文土器」



ことじがたせきせいひん 琴柱形石製品

琴柱形石製品は琴の弦を支える琴柱に形が似ているところから名付けられた。大きさは長さ3～10cmのものまでであるが5～6cm程度のものが多い。その形はバラエティーに富んでいる。基本的には、

本資料のように逆Y字形のもの、エ字形のものであるが、特異なものには上部に勾玉形文を4個配しているもの(富雄丸山古墳)もある。石材は碧玉質のものと滑石質のものがあるが、滑石質のものが新しい製品である。

琴柱形石製品の用途はよくわからないが、小孔が穿たれたものが圧倒的に多く垂下することができ、宝器・護符の用途のあった可能性が説かれている。しかし、孔が貫通されていないものもあることや原位置を保った出土状況を示すものが少なく、使用法は推測の域を出ない。古墳に埋納される年代は古墳時代前期後半から中期前半にわたっている。



くわがたいし 鋏形石

古墳時代の宝器の1つである。弥生時代のテングニシ貝製の腕輪が祖形であるとされており、実際大阪府茨木市紫金山古墳からは直弧文の施された貝輪が2個出土している。基本的な形は環体の上部

である笠状部、下部の板状部及び環体の右あるいは右下に付く突起から構成されている。板状部は正面に向って若干反っている。環体は卵形を示すのが一般的である。

本資料は古式の形式である。新しくなると祖形からかけ離れた形を示し、横方向に刻み目を表裏全面あるいは一部に施し、突起も消失してしまう。石材は碧玉質のものである。鋏形石未成品が北陸地方の玉造遺跡から出土しているので当地方が製作地の1つであろう。また古墳からの出土状況は、各種の型式のものを含んで出土するので、鏡と同様に伝世的な性格のある宝器であろう。主に古墳時代前、中期に埋納される。

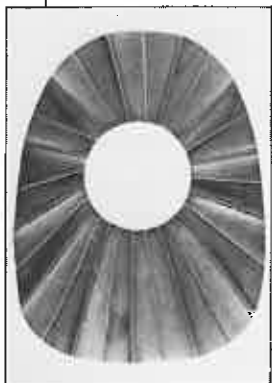
資料紹介

しゃりんせき 車輪石

古墳時代の宝器の1つである。弥生時代のカサガイ製の貝輪が祖形であるとされている。車輪石にもカサガイの肋条が形式化し放射状に線彫が施されている。全体の形状は卵形のもの、円形に近いものの二者がある。ほぼ中央かあるいは中央やや上方に円形の孔をくり抜いている。ほぼ同時代の宝器である石釧、鋏形石と異り、形状のバラエティーは少ない。

分布は畿内を中心に、中国、中部、関東の一部に分布し、石釧よりも分布は狭い。また新しい型式になるにつれて内縁を厚くし線肋刻肋条のある表面の傾斜が急になり輪の幅も

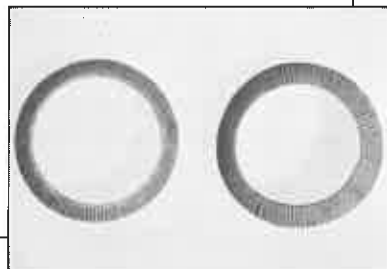
広くなる傾向がみられる。中央の孔の大きさは石釧と同様6cm程度であり、腕に装着するのは困難であり宝器的性格の強いものと解されている。なお、石釧、鋏形石とともに碧玉製腕飾類と総称され、古墳時代前期のメルクマールとなる遺物群である。



いし くりし 石 釧

古墳時代の宝器の1つである。弥生時代のイモガイ製の貝釧が祖形であるとされている。釧とは下腕の装具で環状を呈するものであり、弥生時代では貝製が主流であったが古墳時代に至り銅製・石製・ガラス製のものが出現した。

形態はほぼ正円であり、環体の高さや幅の長さから大きく2型式に分類できる。つまり、環体の幅よりも高さの方が大きいA型式、高さよりも幅の方が大きいB型式である。また石釧には幅約1mmの細線が内方から外方に放射状に彫刻されている。細線は環体上半部斜面に施すもの及び下半部にも施すものもある。また、B型式の中には環体の断面形が三角形状を示し、表裏に刻み目を入れてあり偏平な石釧もある。実用としての貝釧がしだいに石釧に変化し非実用としての宝器の色彩を強めていったと考えられる。



資料紹介

◆資料貸出状況

57. 5 和同開珎^{わどうかいほう}銭范 15点 下関市長府町出土
 // 韃口 3点 //
 // 埴塼 3点 //
- 池田市歴史民俗資料館「歴史のまち池田」展へ
57. 9 文忌寸彌磨墓誌銘拓影 1点
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館へ
57. 6 須恵器 6点 島根県飯ノ山横穴出土
- 勾玉 10点 島根県飯ノ山横穴出土
 管玉 2点 //
- 島根県立八雲立つ風土記の丘「島根の古代」展へ

◆閲覧人員

年度	51	52	53	54	55	56	57
人員	307	300	243	372	597	404	360

◆購入資料



鬼瓦(福岡県都府楼出土)複製品購入

昭和57年度購入費で福岡県筑紫郡大宰府町都府楼出土「鬼瓦」の複製資料を購入した。この鬼瓦は重要文化財に指定されており、奈良時代の貴重な資料である。所蔵者の大田寅人氏の許可を得て、奈良市の中西盛士氏に複製していただいた。

本資料は左下部分4分の1が欠損しているが、中西氏の技術により写真の如く複元された。奈良時代の代表的鬼瓦であり、肉盛り豊かに表現された鬼面は迫真的な憤怒相を表わし、他に比類ない彫刻作品とも見られる。この大宰府周辺より出土する鬼瓦の大半はこれを租形とし都府楼系鬼瓦と呼ばれている。高さ50.5cm。

編集後記

日本各地で歴史を裏付ける考古遺物の新しい発見がなされている。今後も歴史の解明にかかわる発見がなされるであろう。それを期待したい。

さて、本彙報も第7号となりました。紙面の充実を心掛け、多少でも研究者の参考となる記事を掲載していきたいと考えている。今回も諸先生方の玉稿をいただいた。工学部の下間教授には「はすば歯車付綿繰機」の珍しい資料をご紹介いただいた。また泉森皎氏、米田文孝氏にも寄稿していただいた。ここに感謝申し上げます。

資料室の資料整理も徐々に進行しており、

今回、古文化財保存科学研究会（会長山田幸一工学部教授）とタイアップして、石器資料の材質調査を行なうこととなった。自然科学方面よりの研究成果が期待される。

表紙の写真は『金銅莊鞍金具』であり、群馬県多野郡藤岡町付近の古墳より出土したものであり、7世紀初頭の貴重な資料である。全面が銅鍍により青色を呈しているが、元来は全体に鍍金されており、全面が美しく輝いていたものである。その片鱗として左下の部分に鍍金された部分が露出している。豪族など有力者が使用していたものであろう。高さ29cm、幅46cm。

《角田芳昭》